

## 『家なき幼稚園』を訪ふ

三〇

### 倉 橋 惣 三

大阪毎日新聞社の橋詰良一氏は、可なり以前から『家なき幼稚園』といふものを創めてゐられる。其のお話は同氏からも、他の人々からも豫て聞いてゐたが、今度その現場を訪ふて、一層の興味を引き起した。二月の廿四日同幼稚園主催の純真保育講演會が、大阪毎日社樓上で開かれて、それに招かれて行つたを機會として、大阪郊外の池田と寶塚との二ヶ所を訪ふことが出来たのであつた。

家なき幼稚園は、此の名の卒直に示して居る通りに、園舎を有しないで行ふ保育である。池田では、神社の櫛内を中心として居り、寶塚では、清流に沿ふた自然の松林の間で行はれて居る。私の訪問した時は、合憎日曜日で、幼児の喜戯の實際を見ることの出来なかつたのは、役者の居ない舞臺装置だけを見たようなもので、參觀としては極めて不完全なことであるが、私としては、充分に要領を得たの

であつた。

先づ寶塚の方からお話して見ると、驛から右へとつてゆくと、極めて閑雅な住宅地があり、その奥の方に廣やかな平地が流れに沿ふて、ゆつたりと打開けて居る。一帯の松林、流れに架した橋、橋の向ふの低い連丘、なんといふ優しい明るい美しい風致であらう。此の松原を愛の松原といひ、此の橋を千歳橋といふ。この幼稚園の開園當日の光景を撮つた活動寫眞を後で見したが、先づ字幕に、愛の松原千歳橋と出て、鮮明な光線下に此の景色が寫し出された時は、教育の活動寫眞といふよりは、新派劇のフィルムでも始まるかと思へない程ロマンチックな味が濃かつたが、現場の實景が、實に其の通りロマンチックな自然美の粹といつていひ處なのである。これは富豪某氏の所有地を、特に此の事業の爲に提供せられたのだそうぞ。

その松林の一方に瀟洒な小亭があつて、それが、幼児の集合所に用ゐられる。その後ろに、簡単なテントが張つてある。その外に、保育室も遊戯室もない。柔い土と、草と、蒼い空と自由に馳けて行ける廣さ其のものが、此の幼稚園の世界なのである。私は、その橋の袂に立つて、快活に且つ忙しい、幼児達の遊び姿を、あり／＼と想像の目で見た。そこには、先生を中心として、歌うたふ一団が居る。

松の蔭に、しんとしてお話を聴いて居る一団がある。きれいな河原に銘々の辨當を聞いて、銘々の水筒を口にあて、楽しそうに食事してゐる一団がある。ふと向ふの方に二人の幼児が馳けてゆく。蝶を追ふて居るのである。一人の幼児が、ぬき足して行く。小鳥に近づいて見ようとして居るのである。先生のところへ馳けて来た幼児が居る。今見つけた雑草の名を教へて貰ひに来たのである。きやつきやと笑ひながら鬼ごっこをして居る子ども達も居る。砂いぢりに餘念ない子どもが居る。向ふの山の形をクレイオンで寫生して居る子どもが居る。なかには、ぼつねんと獨り空を見て居る子どもが居る。——ふと我れに歸つた時、私は之

れ等の幻の様な感想をまとめて、なんとか言ひあらはして見たいとしたが、言葉が見つからない。橋詰氏を顧みて、たゞ、「いゝですなあ」とだけ言つて見た。

池田の方では、また全く違つた情景を見た。こゝは郊外住宅地に近接、といふよりも寧ろ住宅の間にあるといつた方がいゝ神社の構内である。お鳥井の前に、簡素な小さいバラック小舎があり、それが幼児集合所となつて居るが、子ども達は其の中で遊ぶのではない。一度こゝへ集つて、神社構内の浅い森の間に出るのである。風景としても、廣さとしても、極く平凡な構内である。愛の松原千歳橋の様な、特殊な畫趣も詩趣もない。が、それだけに、こゝには人間に近い親しみがある。詩の自然でない代りに、實に人間界の自然である。私はこゝへ来て、實は、ぼつと呼氣をついた様の氣がした。これが、ノルマルの「家なき幼稚園」である。家なき幼稚園といふものの、普通の典型は、これでなければならぬ。愛の松原の方は家なき幼稚園としては、特殊なものである。あの詩的自然を撞にすることは、幼児達のために、此上もない無比の幸福であることと

言ふまでもない。その有り難い程の幸福さには、見るものも亦酔はされずには居られないが、あれを以て、家なき幼稚園の、一般に通用すべきモデルとしてはならない。あの特に恵まれた自然なくしては、いゝ『家なき幼稚園』が實現出来ないといふ様だが、若し聊かでも思はれたら誤りである。『家なき幼稚園』といふものゝ、眞の發展の上に、寧ろ妨げになるかも知れない誤りである。斯うした意味で、私は、ほつと呼氣つく思ひを池田の方でしたのである。

私は思つた。『家なき幼稚園』のある種類は都會の公園の一隅で出来る筈のものである。町並み建て込んだ下町の空地で出来る筈のものである。寺の境内、工場の裏でも出来る筈である。最も小さい『家なき幼稚園』なら、餘り不潔で陰混でない限り、町の露路でも出来る筈である。それ等が、模範の『家なき幼稚園』ではないかも知れないが、そう考へた時にか、『家なき幼稚園』の一つの原理が徹底するのである。私がそう思つた許りではない。大阪の郊外で、此の美しい『家なき幼稚園』を經營して居られる橋詰氏も、去年の震災後の東京を見舞はれた時、特に私を訪ねて、今

の此の東京の有様こそ、『家なき幼稚園』の必要の場合ではないかと、熱心に力説せられたことがある。私は、當時、その貴い意見を實現するの機會を見出し得なかつたけれども、實に適切な忠告として深く同感したのであつた。今、此の美しい『家なき幼稚園』を見て、其の自然美の方面、特殊の方面に酔ふたと共に、其の方面にのみ酔はさるゝことのないために、自らのために、之れを書き添えて置く。

兎に角く、『家なき幼稚園』は、幼児保育上、意味深い一つの實行である。すぐ之れを行ふと否とに拘はらず、誰れでもいろ／＼考へさせられることの多い問題である。特に、『家ある幼稚園』にとつて、有益なる示唆に富む問題である。(大阪では此の橋詰氏のものゝ外、市の經營にかゝる露天幼稚園がある。)